

学長からのメッセージ

新しい年を迎えて

2012 年が新たな復興の年になることを願い、お茶の水女子大学はその復興の一端を担って行きたい。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災後、本学では被災学生支援と被災地支援を速やかに開始し、災害対策研究にも着手した。

まず学内の被災学生に対しては 2011 年 3 月末に被災学生支援金制度を設け、主に住家の全壊・半壊等の学生を対象として、学部生には 4 年間、博士前期課程の学生には 2 年間、後期課程の学生には 3 年間経済的な支援をすることとし、新たに入学する学生にもこの制度を適用することにした。

また、被災地支援活動では次のことを基本方針としている。被災地のニーズに合致した効果的支援であること、大学の特性を生かした支援であること、中長期的な展望をもった計画的な支援とすること、の三点である。

支援活動は、教育支援を中心に、理科教育や幼児教育支援を行っているが、これは、学校現場で必要とされている教材の提供などに加え、教員研修や授業補助も含めた物的・人的両面での支援である。

災害対策や復興に関する研究プロジェクトとしては、「小学校モデル」の構築、災害時の緊急避難行動に関する認知科学からの研究、避難者確認システムの開発などがあり、中でも、「小学校モデル」では、単に教育機能やコミュニティ機能だけでなく、新たなエネルギー循環を実現する生活空間の構築を目指している。どれも小規模な研究プロジェクトながら、これまでとは異なった視点から新しい生活環境を提案するプロジェクトであり、汎用性が期待できる。

これ以外にも、学生のボランティア活動や教員個人のネットワークを活用した支援活動が活発に行われているが、学生が支援活動に参加する際には、とくに学生の自発性を尊重し、安全を図るとともに学生の成長に資する活動であることを重視している。

そしていずれの活動においても、大学として新たな社会の構築に資することを本学は基本的に志向している。

そのためにも、今、私たちは科学技術の意味や社会の発展の意義を根本から問い直す必要がある。それは、今回の災害が、自然災害のみならず原子力発電所の事故にも起因するものでもあり、したがって自然災害に対する防災と復興という問題に加えて、放射性物質による被害の実態把握と対応が緊急の課題となったからである。

防災と復興を仮に一次的、直接的課題とすれば、原子力発電所の事故は、二次的課題、つまりエネルギー問題を私たちに提起した。それは、エネルギーの確保と消費の両面に関わる課題である。確保の面では、原子力エネルギーが齎す禍と福の具体的かつ厳密な検証と、代替エネルギーの研究開発が急務であり、消費の面では、生活の仕方の見直しを含めて利便性そのものの再考が求められている。

さらに、第三の課題がある。それは、研究においては、科学や技術の進歩が人間にとってあるいは社会にとって何を意味するかを常に意識しておく必要があるということであり、教育の場としては、次世代を担う人材としてどのような人々を育成するのか、その理念を明確にしておくことである。そしてこれは大学にとって最も本質的な課題といえるだろう。

近代科学は、自然を対象化し解明し支配することを目標とすることによって、社会の発展に寄与してきた。また、その手法は人間にも適用可能とみなされ、それによって学問の客観性が保証されると考えられてきた。同時に技術開発は科学的知識を具体的場面で利用可能にすることで、科学と技術が相即して私達の生活を快適で豊かなものとしてきた。

こうした科学技術の発展の中に身を置き、そして今回の大震災と原発事故に直面して、私たちは科学と技術の意味を改めて問わざるを得ない。

昨秋、科学技術振興機構による「日中大学フォーラム」が開催され、そこで「大震災と大学の役割」という震災特別セッションが行われた。このセッションには、東北にある三大学と中国四川省の大学からもパネリストを招き、私はモデレーターとして参加したが、そこで発言された「大学は社会の良心である」という言葉がとくに印象に残っている。四川大地震は内陸での地震であり、東日本大震災は地震・津波・原子力発電所の爆発という大きな相違はあるが、大災害の後各大学がどう対処したか、この経験を今後どう活かすかなど極めて有益な議論がなされた。特に大学の役割を考えたとき、第三の課題、つまり次世代を担う人材を育成する教育研究機関としての課題を果たすには、大学が「社会の良心」となって、長期的な観点から人類の未来を描きつつ研究と教育に当たらなければならない。

これまで蓄積してきた科学の進歩を止めることは賢明ではない。そうではなく、近代科学への依存や技術に対する過信を再考することが求められているのではないか。

「技術は単に手段であって、それ自体善でも悪でもない。重大なのは、人間が技術から何を作り出すのか、何の目的で人間は技術を用いるのか、人間が技術をいかなる制約下に置くのか、である。技術に支配されるのではなく、技術を支配する人間とはどのような人間か、が問題なのである。」(カール・ヤスパース『歴史の起源と目標』*Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, 1949 年)

日常生活や人間が存在することの意義を念頭において、人間性を重視し、科学と技術の在り方を問い続ける姿勢が現在の状況において大学には求められているのではないだろうか。

お茶の水女子大学の教育の理念は、「知識」と「見識」と「寛容」にある。ここ数年の教育改革を通して、本学では、確かな「知識」、適切に判断する「見識」、多様性を理解し認める「寛容」をカリキュラムの形で実現している。

本学で学んだ学生はそのような教育を受けたことを心に留めて、これまで培った力を社会で存分に発揮してほしい。お茶の水女子大学の卒業証書や修了証書は、「社会の良心」として専門的な知識を発揮しうる能力を保証するものである。卒業生には、自信と勇気をもって社会に身を投じ、新しい未来を創っていただきたいと切に願う。

お茶の水女子大学は、今後もこの教育理念の下、優れた人材を育成し、高度な教育研究機関として社会の豊かな発展に寄与して行きたいと考えている。

2012 年 1 月
学長 羽入佐和子

学長からのメッセージ
新しい年を迎えて